

大学体育会参加者の所属・性別・学年と生活満足度の関係

河合季信*, 平川武仁*, 大高敏弘*, 安藤真太郎*, 平山素子*,
吹田真士*, 坂本道人*, 仙石泰雄*, 成瀬和弥*, 萩原武久*

The relation between the lifestyle satisfaction level and university sports club union participant's belonging department, gender, grade.

Toshinobu KAWAI *, Takehito HIRAKAWA *, Toshihiro OTAKA *, Shintaro ANDO *,
Motoko HIRAYAMA *, Masashi SUITA *, Michito SAKAMOTO *, Yasuo SENGOKU *,
Kazuya NARUSE *, Takehisa HAGIWARA *

The purpose of this study was to analyze and discuss the satisfaction level of human relationship and lifestyle as a whole of the university students that belong to the sports club union, from the viewpoint of gender, grade and belonging clubs (official or unofficial), in order to "enhance the activity of sports clubs" of the university. The main results are as follows.

(1) The average of the students belonging to sports clubs, tended to be satisfied in all the "rate of lifestyle satisfaction" measures.

(2) Among each measure, the highest average of the students belonging to sports clubs, was "the relationship with family", and the second highest was "the relationship with friends and colleagues" and the third was "sports (competitive sport) activity". Also, "the present living environment", "economical aspects of living", "current health condition" and "the present life as a whole" were significantly lower than the former three measures ($p < .01$).

(3) In the satisfaction rate of human relationship measures such as "the relationship with family" and "the relationship with friends and colleagues", the satisfaction rate of women was significantly higher than men in the first grade (family: $p < .05$, friends: $p < .01$). Meanwhile, there was no significance by gender for the students who are above second year.

(4) In the measure about "sport (competitive sport) activity", the satisfaction rate of men was significantly higher than the women ($p < .01$) and the students who belong to unofficial clubs and the medical branch had significantly higher satisfaction rates than the students belonging to the sports club union ($p < .05$).

(5) In the measure about "current health condition", while the satisfaction rate of men gets higher as the grades proceeds, the women become lower.

* 筑波大学

はじめに

大学における運動部活動の位置づけは、ここ数十年間で大きく変わった。小原⁶⁾によると、大学における体育の見直しは、1971年の中央教育審議会答申において、「保健体育の単位を卒業の要件として画一的、形式的に課すだけでは、その本来の目的は達成されない」として、大学における体育のあり方に検討を求めたことにはじまる。そして、1985年の臨時教育審議会第2次答申では「視野を授業としての体育のみに限定せず、課外のスポーツ活動、さらには、社会体育との密接な連携のもとに設計すべきである」という指針が示された。さらに、1991年の大学設置基準の改正、いわゆる「大綱化」によって、必修科目としての保健体育科目の法的根拠はなくなった。

一方で、2000年に策定されたスポーツ振興基本計画⁴⁾では、その柱の一つである「生涯スポーツ社会の実現に向けた、地域におけるスポーツ環境の整備充実方策」において、スポーツ振興における大学の役割として「施設、人材等の面でスポーツに関する豊富な資源を有している大学等の高等教育機関においては、学生のスポーツ活動の充実はもとより、地域の一員として…」と「学生のスポーツ活動」が第一にあげられている。上記の流れから考えると、この場合のスポーツ活動とは、いわゆる「運動部活動」をさしていると思われる。大学における「運動部活動の充実」が国策としての意味を持ってきたと考えることができる。

こうした流れを受けて、蓬田⁸⁾は、大学体育会所属学生の運動生活の実態調査を行った。その結果、①体育施設への満足度は高いが、シャワー室など周辺施設への不満が高いこと、②授業の開設方法によってクラブ活動が制限されること、③体育会所属学生は経済面、食事面などに問題を抱えていること

などが明らかになった。こうした結果は、大学におけるスポーツ活動の環境整備には有用であると考えられるが、大学における生活を充実させるための人間関係や生活全体の満足度にどのような影響があるかについて、十分に言及されているとは言えない。したがって、これらの満足度に関する実態を明らかにし、運動部活動に取り組む大学生のスポーツ生活の質の向上に寄与する知見を得ることが必要であると考えられる。

本研究では、大学体育会に所属する学生の人間関係や生活全体に関する満足度を、性別、学年、所属(部会、同好会)などの観点から分析し、それぞれの類似点と相違点について検討することを目的とした。

方法

1. 調査内容および手続き

調査には、岳藤と山口³⁾が作成した「生活の満足度」尺度を、スポーツ活動用に修正し、「家族との人間関係」、「友人や仲間との人間関係」、「スポーツ(競技)活動」、「現在の生活環境」、「生活における経済的側面(仕送り・アルバイト・奨学金などの合計)」、「現在の健康状態」、「現在の生活全体(日常生活・スポーツ活動)」の計7尺度に関する調査用紙を使用した。評定は、「不満(-3)」、「かなり不満(-2)」、「やや不満(-1)」、「どちらともいえない(0)」、「やや満足(1)」、「かなり満足(2)」、「満足(3)」までの7段階とした。これらの評定では「どちらともいえない」を中間値として、平均点が正であれば満足傾向があり、負であれば不満足傾向があることを示している。

2. 調査対象・調査時期

本研究では、大学の課外活動団体として部会、同好会・クラブに所属する学生を比較検討した。そのためには、各種スポーツで専門的に活動する学生から、スポーツを愛好する

団体まで、幅広く回答を得る必要があった。そこで、体育を専門に学ぶ学部を有し、多くのスポーツ活動団体を有する総合大学として、筑波大学を調査対象とした。筑波大学体育会は、活動の内容によって「部会(41団体)」、「同好会(15団体)」、「医学支部(19団体)」に分けられている。

調査時期は、2006年2月中旬から下旬の約2週間であった。調査用紙は、2月上旬に開催された課外活動団体の会議に参加した各団体の代表者に配布し、その際に調査の趣旨を説明し、調査対象者への配布と回収を依頼した。

回答紙の回収数は、部会706名、同好会158名、医学支部196名であり、回収率は68.52%であった。また、欠損値等を含む回答紙を除いた結果、有効回答数は1018名であった。表1に有効回答数の内訳を示した。

3. 統計処理

まず、7つの尺度の平均値の差を検討するため、1要因7水準の分散分析を行なった。

次に、有効回答を、部会所属男子502名、部会所属女子186名、同好会・医学支部所属男子217名、同好会・医学支部所属女子113名の4群に分け、7つの尺度における上記4群の満足度の差を検討するため、3要因(性別2水準×所属2水準×学年3水準)の分散分析を行った。多重比較にはLSD法を用いた。これらの分析の有意水準を5%、有意傾向を10%として判断した。

結果

1. 各尺度における学生の満足度

表2は各尺度の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、尺度間の差は有意であった($F(6, 7125)=125.9, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、満足度に関して、「家族との人間関係」は他の尺度よりも高いこと、「友人や仲間との人間関係」は「家族との人間関係」以外の尺度よりも高いこと、「スポーツ(競技)活動」は「家族との人間関係」と「友人や仲間との人間関係」よりも高いことが認められた($MSe=1.19, p<.05$)。

表1 有効回答者の内訳

所属	部会				同好会・医学				計
	1年	2年	3年以上	小計	1年	2年	3年以上	小計	
男子	183	167	152	502	73	66	78	217	719
女子	63	63	60	186	47	42	24	113	299
小計	246	230	212	688	120	108	102	330	1018

表2 各尺度の平均と標準偏差

尺度	回答数	平均	標準偏差
A:家族との人間関係	1018	1.82	1.22
B:友人や仲間との人間関係	1018	1.71	1.10
C:スポーツ(競技)活動	1018	1.20	1.33
D:現在の生活環境	1018	0.93	1.37
E:生活における経済的側面	1018	0.95	1.56
F:現在の健康状態	1018	0.96	1.57
G:現在の生活全体	1018	0.99	1.36

A>B>C>D,E,F,G ($p<0.05$)

しかしながら、「現在の生活環境」,「生活における経済的側面」,「現在の健康状態」,「現在の生活全体」の間には、有意差は認められなかった。

2. 家族との人間関係

分散分析の結果、「性別と所属」($F(1, 1006)=3.75, p<.10$)、「性別と学年」($F(2, 1006)=3.30, p<.05$)で交互作用が有意傾向と有意であった。

そこで、「性別と学年」で単純主効果を分析した結果、1年生において男子よりも女子の満足度が有意に高いこと($p<.05$)が認められた。またLSD法による多重比較の結果、男子において1年生よりも3年生以上、2年生よりも3年生以上の満足度が有意に高いことが認められた($MSe=1.47, p<.05, 図1$)。

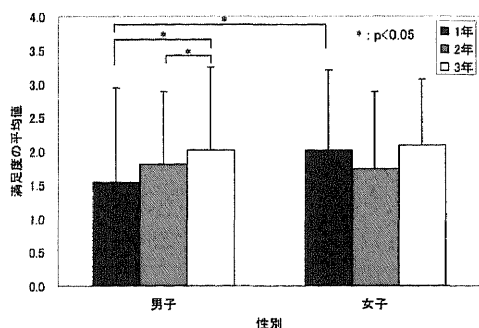


図1 家族との人間関係の満足度に関する性別と学年の平均値と標準偏差

3. 友人や仲間との人間関係

分散分析の結果、「性別と学年」($F(2, 1006)=2.45, p<.10$)で交互作用が有意傾向であった。

そこで、「性別と学年」で単純主効果を分析した結果、1年生において男子よりも女子の満足度が有意に高いこと($p<.01$)が認められた。またLSD法による多重比較の結果、男子において1年生よりも3年生以上の満足度が有意に高いことが認められた($MSe=1.21, p<.05, 図2$)。

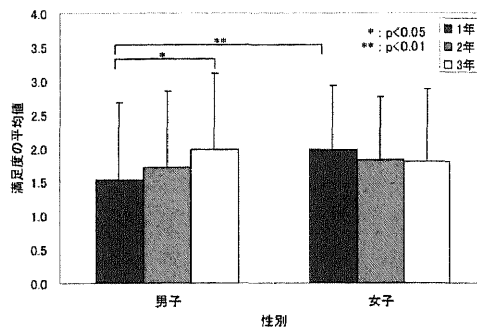


図2 友人や仲間との人間関係の満足度に関する性別と学年の平均値と標準偏差

4. スポーツ(競技)活動

分散分析の結果、「性別」と「所属」の主効果が有意であり、女子よりも男子の満足度が高いこと($F(1, 1006)=9.96, p<.01, 図3$)、部会よりも同好会・医学の方が満足度が高いこと($F(2, 1006)=5.32, p<.05, 図4$)が認められた。

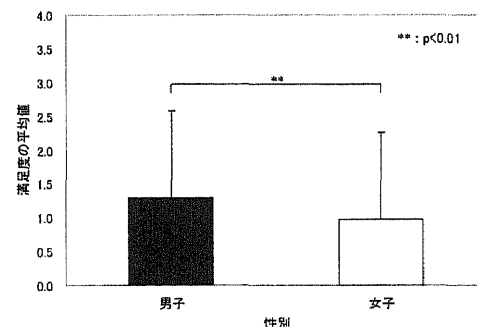


図3 スポーツ(競技)活動の満足度に関する性別の平均値と標準偏差

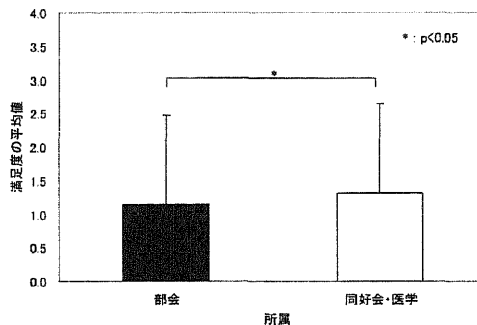


図4 スポーツ(競技)活動の満足度に関する所属の平均値と標準偏差

5. 現在の生活環境

分散分析の結果、「性別と所属」(F(1, 1006)=3.29, $p<.10$), 「性別と学年」(F(2, 1006)=3.27, $p<.05$)で交互作用が有意傾向と有意であった。

そこで、「性別と学年」で単純主効果を分析した結果、1年生において男子よりも女子の満足度が有意に高いこと($p<.05$)が認められた。またLSD法による多重比較の結果、男子において1年生よりも2年生と3年生以上の満足度が有意に高いことが認められた(MSe=1.86, $p<.05$, 図5)。

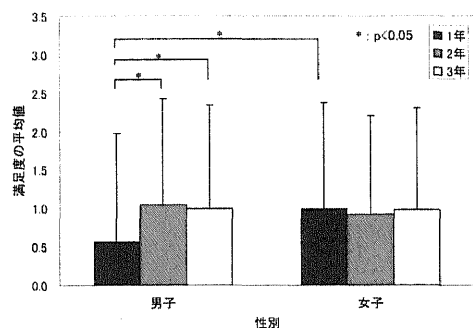


図5 現在の生活環境の満足度に関する性別と学年の平均値と標準偏差

6. 経済的側面

分散分析の結果、いずれの要因間にも有意差は認められなかった。

7. 現在の健康状態

分散分析の結果、「性別と学年」(F(2, 1006)=5.15, $p<.01$)で交互作用が有意傾向として認められた。

そこで、「性別と学年」で単純主効果を分析した結果、1年生において男子よりも女子の満足度が有意に高いこと($p<.05$)、3年生以上においては、逆に女子よりも男子の満足度が有意に高いこと($p<.05$)が認められた。またLSD法による多重比較の結果、男子において1年生よりも3年生以上の満足度が有意に

高く、女子においては逆に2年生と3年生以上よりも1年生の満足度が有意に高いことが認められた(MSe=2.44, $p<.05$, 図6)。

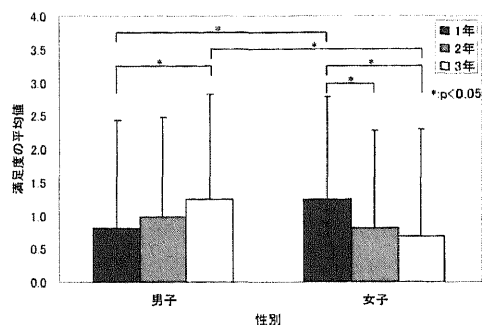


図6 現在の健康状態の満足度に関する性別と学年の平均値と標準偏差

8. 現在の生活全体

分散分析の結果、「性別と所属」(F(1, 1006)=6.45, $p<.05$)の交互作用が有意であった。

そこで、「性別と所属」で単純主効果を分析した結果、部会において女子よりも男子の満足度が有意に高いこと($p<.05$)、女子において部会よりも同好会・医学の満足度が有意に高いことが認められた(MSe=1.84, $p<.01$, 図7)。

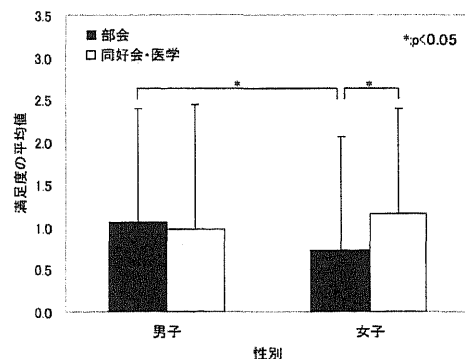


図7 現在の生活全体の満足度に関する性別と所属の平均値と標準偏差

考 察

体育会に所属する学生全体でみると、各尺度における満足度の平均値は、「家族との人間関係」が1.87で最も高く、次いで「友人や仲間との人間関係(1.71)」、「スポーツ(競技)活動(1.20)」の順に高かった。前の2つの尺度は、大きく「人間関係」とまとめることができる。今回の調査では「不満(-3)」から「満足(3)」までの7段階で評定を行っており、上記の3尺度は「やや満足(1)」と「かなり満足(2)」の間にあった。すなわち、今回調査の対象となった大学体育会に所属する学生は、人間関係やスポーツ活動そのものには、概ね満足していたといえる。

一方で、「現在の生活環境(0.93)」、「生活における経済的側面(0.95)」、「現在の健康状態(0.96)」、「現在の生活全体(0.99)」は先の3つの尺度に比べて有意に低かった。「現在の生活全体」を除く3つの尺度は、大きく「生活の質」と捉えることができる。生活の質に関しては、平均値が「どちらともいえない」から「やや満足」の間にあり、不満とまではないかなものの、満足度は低い結果となった。

「現在の生活全体」は他の6尺度を総合的に評価したものと考えることができるが、その満足度は6尺度のちょうど中央にあり、今回調査対象となった体育会所属の大学生は、生活全体としての満足度は「やや満足」と感じていて、その中でも「人間関係」や「スポーツ活動」には比較的高い満足度を感じ、「生活の質」には比較的低い満足度であると解釈できる。

以降、満足度の高かった「人間関係」および「スポーツ活動」と、満足度の低かった「生活の質」のそれぞれについて考察を進める。

1. 人間関係に関する満足度

人間関係に関する尺度を性別と学年でみると、1年生においては家族との人間関係、友

人や仲間との人間関係ともに、女子が男子より満足度が高かった(図1, 図2)。一方で、2年生以上では性別による相違は認められなかった。青木²⁾は、高校運動部員の学校生活適応感に関する調査を行い、女子運動部員は男子運動部員よりソーシャル・サポートの得点が有意に高かったと報告している。すなわち、女子部員は男子部員よりサポートしてくれる人間関係が構築されていたと考えられる。本研究の結果でも1年生においては同様であったが、男子においては学年が進むにつれて、人間関係の満足度が高くなっていった(図1, 図2)。この点に関して、男子においては1年生から3年生へと学年を経る過程において、お互いに交流する回数が増えることを踏まえると、スポーツ活動を通じた意思の疎通や相談の機会があったことが予想され、その結果、人間関係のあり方が変化していったと考えられる。

2. スポーツ活動に関する満足度

スポーツ(競技)活動に関する満足度を性別と所属でみると、男子は女子より満足度が高く、同好会・医学支部所属学生は部会所属学生より満足度が高かった(図3, 図4)。

一般に部会所属学生の競技における目標は、日常生活における運動活動の時間数、年間における活動日数を勘案すると、同好会所属学生に比べて高いことが予想される。この点を踏まえ、スポーツ活動に関する満足度を競技目標の達成度との関係から考えると、同好会・医学支部所属学生が相対的にスポーツ活動に満足しているのに対して、部会所属学生が比較的低い傾向にあったことは、運動活動の現場の視点から考えられることであろう。ただし、本研究では、競技に対する各学生の目標の達成度を調査していないため、スポーツ活動の満足度と目標達成度との関係について明確に言及することはできない。それゆえ、今後、満足度と達成度との関係について

検討していく必要がある。

一方、青木と松本¹⁾は、高校運動部員の部活動適応感について調査し、女子は男子に比べて弱適応感や不適応感の者が多かったと報告している。その原因として、女子は「指導者への満足」や「部員相互の人間関係」などの集団維持機能を規定する人間関係において、絶えず他者の影響を受けていることをあげている。本研究において、家族や友人などとの人間関係について、男子より女子の満足度が高い結果であった(図1、図2)ことを考えると、今後、女子においては指導者との関わり方についてより詳細に検討してみる必要があるだろう。

3. 生活の質に関する満足度

今回調査の対象となった大学では、1年生の8割弱が「学生宿舎」と呼ばれる学生寮で生活している⁷⁾。一方で、2年生では約25%、3年生以上では約10%と学生宿舎への入居率は低くなる。この大学の学生宿舎は、トイレ、風呂、台所などが共同である。特に風呂に関しては、浴場の開店時間が限られており、入居者の60%以上が不満であると答えていた⁷⁾。今回の調査では、生活環境の満足度に関して、男子の1年生が2年生および3年生以上に比べて有意に低かった(図4)。今回の調査と同じ大学の体育会所属学生を対象に調査を行なった蓬田ら⁸⁾の報告によると、夜9時以降まで練習を行なうクラブは約40%あることが確認されている。一般に練習終了後の用具の後片付けなどは1年生が中心となって取り組むことが予想される。そのため、上級生に比べて、下級生は帰宅が遅くなる傾向があると考えられる。その結果、浴場の閉店時間に間に合わずに、入浴が困難になったり、食事時間が遅くなったりしたことが原因となり、「現在の生活環境」に関する満足度の低下につながったと考えられる。こうした要因は、今回の調査対象となった大学に特有の

問題であると考えられるので、下級生の生活環境の整備を整えていくことで、改善されていく可能性が十分あると考えられる。

一方、経済的側面に関して、蓬田ら⁸⁾は、体育会所属学生は一般学生に比べて1ヶ月あたりの収入が少ないことを報告している。このことは、クラブ活動に費やす時間が多いためにアルバイトができず、その収入を得ることができない一方で、クラブ活動に必要な経費がかかるため、生活費にあたる支出を削っている可能性を示唆している。また、生活における経済的側面の満足度が2番目に低かったという結果(表2)は、蓬田らの結果と共通した結果とも考えられる。そして、性別や学年、所属といった要因間に有意な差は認められなかった。このことは、経済的側面に関して、体育会所属学生全体の満足度は低いことを示していると考えられるので、「運動部活動の充実」を図ることをねらいとして、運動部所属学生を対象とした奨学金制度などの措置を講じる必要があると思われる。

最後に、現在の健康状態に関して、男子は1年生から3年生に向かって満足度が高まっているのに対して、女子は1年生から3年生に向かって低下していることが認められた(図6)。健康状態については、これまでも、身体的健康、精神的健康、社会的健康の観点から検討⁴⁾されており、今後、加齢に伴った上記の健康状態に関する変化の構造を明らかにし、学生生活の質の向上に寄与する知見を得ていく必要があるだろう。

まとめ

本研究では、大学における「運動部活動の充実」を図るため、体育会に所属する学生の人間関係や生活全体に関する満足度を、性別、学年、所属(部会、同好会)などの観点から分析・検討した。本研究の主な結果は以下の通りである。

(1) 体育会所属学生全体の平均値でみると、

「生活の満足度」尺度のすべてにおいて満足傾向にあった。

- (2) 各尺度における体育会所属学生全体の平均値は、「家族との人間関係」が最も高く、次いで「友人や仲間との人間関係」、「スポーツ(競技)活動」の順に高かった。また、「現在の生活環境」、「生活における経済的側面」、「現在の健康状態」、「現在の生活全体」は先の3つの尺度に比べて有意に低かった。
- (3) 「家族との人間関係」、「友人や仲間との人間関係」といった、人間関係に関する尺度では、1年生において女子が男子より満足度が高かった。一方で、2年生以上では性別による相違は認められなかった。
- (4) 「スポーツ(競技)活動」に関する尺度では、男子は女子より満足度が高く、同好会・医学支部所属学生は部会所属学生より満足度が高かった。
- (5) 「現在の健康状態」に関する尺度では、男子は学年が進むにつれて満足度が高くなるのに対して、女子は低くなった。

本研究の結果から、今回調査対象となった体育会所属の大学生は、生活全体としての満足度は「やや満足」と感じていて、その中でも「人間関係」や「スポーツ活動」には比較的高い満足度を感じ、「生活の質」には比較的低い満足度であると解釈された。また、大学体育会所属学生の生活に関する満足度を向上させるためには、女子においては指導者との関係のあり方を見直す必要があること、全体としては経済的側面からの支援策を考える必要があることが示唆された。

謝 辞

本研究は、筑波大学体育センター教員によって拠出された研究助成金(平成17年度)の補助を受けて実施されたものである。ここに体育センター教員各位に対して深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 青木邦男, 松本耕二: 高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因, 体育学研究, 42: 215-232, 1997.
- 2) 青木邦男: 高校運動部員の学校生活適応感に関連する心理社会的要因, 学校保健研究, 40: 411-424, 1998.
- 3) 岳藤史泰, 山口泰雄: 高齢者の余暇活動とクオリティ・オブ・ライフに関する研究, 自由時間研究, 12, 102-111, 1992.
- 4) 松本壽吉: 健康度診断検査についての研究, 健康科学, 9, 159-180, 1987.
- 5) 文部省編: スポーツ振興基本計画, 文部省, 2000.
- 6) 小原 晃: 大学保健体育の現状と動向について, 筑波ジャーナル, 57-60, 筑波大学, 2002.
- 7) 筑波大学編: 筑波大学学生生活実態調査報告書(平成15年度), 筑波大学, 2004.
- 8) 蓬田高正, 稲垣裕美, 道上静香, 小俣幸嗣, 福原祐三, 河村レイ子, 安藤真太郎, 高木英樹: 筑波大学体育会所属学生の運動生活実態調査, 大学体育研究, 25: 55-70, 2003.